

清末中国の文明観転換と自己認識

手代木 有 児

【要約】 清末知識人は、中国文明を唯一の文明と見る文明観から転換し西洋文明の優位を認める過程で、どのように新たな自己認識を形成したのだろうか。従来この問題は、主に日清戦争後の国民性認識として論じられてきた。しかしそこに見られる中国人の保守性、消極性、怠惰性、虚偽性、卑屈性、利己性等の強調は、一八七〇年代後半から八〇年代の先進的知識人における文明観転換の中で、郭嵩燾、王韜、張德彝、鍾天緯、鄭觀応などにすでに見出せる。注目すべきは、一八七〇年代半ば以降、『万国公報』に掲載されたアレクサンダー・ファーバーら宣教師の漢文著作では十九世紀西洋の否定的中国認識をふまえた中国国民性批判が展開され、それが知識人に広く流布していたことである。こうした宣教師と知識人の中国国民性批判を比較検討すると、知識人が宣教師の著作から強い影響を受けていたことがわかる。西洋近代が生んだ否定的中国認識を継承する宣教師の中国国民性批判が、伝統的中華意識に代わる新たな自己認識を強力に方向付けたのである。

史林 一〇二巻一号 二〇一九年一月

はじめに

古来中国では、中国文明こそが唯一普遍の文明であると考えられていた。こうした文明観は、天下は中国文明が及ぶ「中華」とそれが及ばない「夷狄」から構成されるとする秩序観を生み出した。そしてこの文明観と秩序観からなる華夷的世界像が前漢時代までには形成され、以来何度かの変動をへつつも中国人に共通の認識でありつづけた^①。しかし十九世紀半ばのアヘン戦争以降、ことに洋務運動期（一八六〇—一九〇年代）における西洋近代との衝突とその受容を通じて、中国

の知識人は徐々に西洋文明が中国文明よりも優位にあることを認識するようになる。この我々の想像を絶する未曾有の体験の中で、中国の知識人がほぼ伝統的文明観から転換を遂げるのは、日清戦争後のことである。

それではこの過程で、中国の知識人は西洋との対比でどのようなようにして新たな自己認識を獲得し、西洋文明中心の世界像の中に自らを位置づけていったのであろうか。この問題は、清末における変法論、革命論の形成を考える上での根本的な問題でありながら、実は必ずしも正面から研究されてきたわけではない。本稿は、清末知識人における新たな自己認識の形成過程をたどり、そこに見られる共通性を明らかにするとともに、そうした自己認識と在華西洋人、特にプロテスタント宣教師（以下、宣教師）の言説の関わりを考察し、もって清末中国における文明観転換にもなう新たな自己認識の形成が、いかにしてなされたかを明らかにすることを目的としている。^②

西洋文明が中国文明より優位にあることが認識され、中国文明を唯一普遍とする文明観が崩壊すると、中国の知識人にとって中国文明をかつてのように「聖人の道」「不変の道」「仁義の道」といった完成された体系として捉えることは困難となった。そうした中で新たな自己認識を明確にする必要に迫られた清末知識人は、中国の風俗、習慣、道徳、儀礼祭祀などに示される中国人の性格・価値観などに注目して、西洋文化との比較で中国文化を批判する議論を盛んに展開した。

一九八〇年代以降の思想史研究においては、こうした中西比較による自己認識は、もっぱら日清戦争後に高揚した国民性批判の問題として論じられてきた。梁啓超の「中国積弱遡源論」（一九〇二）は、嚴復の「論世変之亟」（一八九五）などとともにそうした国民性批判の初期の代表作として知られる。梁啓超はこの論文で、中国弱体化の原因のうち風俗に由来するものとして、中国人の「奴性」、「愚昧」、「為我」、「好偽」、「懦弱」、「無動」という六つの性格をあげている。例えば「奴性」については次のように指摘する（以下、引用文中の（ ）内は特に断らない限り文脈をふまえて手代木が補った）。

（中国では）他人にへつらうのがうまい人にかぎって他人に威張ってみせるのが得意であり、他人に威張るのが得意な人にかぎっ

て他人にへつらうのがうまい。

西国の民は一人として他人を虐げることがなく、また一人として他人に虐げられることがない。だが中国は違う。他人を虐げる人でなければ、他人に虐げられる人であり、他人に虐げられる人が同時に他人を虐げる人となる。「中略」これは何とも名づけようがないが私はこれを奴性と名付けておこう。

また「愚昧」については次のようにいう。

私が（中国人の知恵に関して）もつとも悲しむのは、知恵のとくに優れた人が少ないことではなく、通常の知恵をもつ人が少ないことである。「中略」西国の民は六、七歳の時から男女を問わず学校に入らねばならず、十四、五歳でやっと卒業する。「中略」だから何人もみな自分で身を処し、生計を立てることができ、普通の手紙なら誰もがかけ、平易な新聞ならだれもが読める。

「為我」については次のようにいう。

（日清戦争の）戦端が開かれてみると、中国は終始直隸一省のみで日本全国と敵対して大敗を喫した。「中略」中国は十八国に分かれていてだけではない。各省の総督・巡撫も彼らが支配する省を一集団として結合することができない。彼等は戦禍が幸いに己の管轄地域に及ばないよう、また城市失陥で免職処分を受けないよう守備に名を借りて勝敗を傍観したにすぎない。彼らが意を用いるのはおのれ一人のためであり、一省のためではない。

「好偽」については次のようにいう。

今日の中国人の如く、虚偽を好むこと、その極点に達したのは天下にまれであり、古今未曾有である。君が臣を使い、臣が君に仕え、長上がその配下をひきい、配下が長上を奉じ、官が民を治め、民が官に従い、紳士が仲間をつくり、友が朋友と交わる際には、何人であれ、何処であれ、何時であれ、みな虚偽の二字によって行^④う。

日清戦争後、列強による中国分割への危機感が激化する中でこうした国民性批判が高揚したことは間違いない。だが国民性批判は決して日清戦争後に始まるものではない。日清戦争以前の先進的知識人の著作には、少なからず日清戦争後と類似する自己認識が見出せる。以下ではまず、文明観転換の中で新たな自己認識がたちあらわれる過程を明らかにする。

① 檀上寛『天下と天朝の中国史』岩波書店、二〇一六年、堀敏一『中国と古代東アジア世界』岩波書店、一九九三年など。

② 清末の文明観転換については拙著『清末中国の西洋体験と文明観』汲古書院、二〇一三年（以下『文明観』）で詳細に論じた。本稿はその内容をふまえている。

③ 日清戦争後の国民性批判をめぐる研究については、袁洪亮「中国近代国民性改造思潮研究総述」『史学月刊』二〇〇〇年第六期を参照。

代表的研究には沙蓮香編著、津田暲訳『中国民族性』第一部 中外から見た百五十年間の「中国人像」グローバル科学文化出版、二〇一七年、同『中国民族性』第二部 一九八〇年代、中国人の「自己認

知』グローバル科学文化出版、二〇一七年、リディア・リウ（Liya Liu）「国民性を翻訳する―魯迅とアーサー・スミス―」（中里見敬・清水賢一郎訳）『言語文化論究』二三号、九州大学大学院言語文化研究院、二〇〇八年、黄興濤「美国传教士明恩溥及其『中国人的氣質』」明恩溥著、佚名訳、黄興濤校注『中国人的氣質』中華書局、二〇〇六年所収など。

④ 梁啓超「中国積弱溯源論」『飲冰室合集』上海中華書局、一九四一年再版、文集第二冊所収。訳文は『新編原典中国近代思想史』第二卷（岩波書店、二〇一〇年）所収の伊東昭雄訳によった。

第一章 文明観転換と新たな自己認識の形成

第一節 文明観の変動と新たな自己認識 — 劉錫鴻、郭嵩燾、王韜 —

アヘン戦争は伝統的文明観が変動に向かう起点とはなったが、直ちに伝統的文明観の変動をもたらしたわけではなかった。例えば、アメリカ合衆国の民主制を肯定的に紹介した梁廷枬の『海国四説』（一八四六）は、その自序で「西洋諸国の風気はただ利を貪るのみ」と述べ、依然として伝統的な華夷の枠組みの下で西洋人を「利を貪るのみ」の「夷狄」と見なしていた。文明観転換への重要な契機となったのは、一八六〇年代以降宣教師による出版教育活動が活発化したまた洋務運動が開始され西洋情報が増加したこと、そして一八七〇年代後半から常駐外交使節派遣や留学生派遣が開始され、直接の長期にわたる西洋観察が可能になったことだった。ここではそうした中で西洋理解を深めた知識人のうち、洋務運動以前に青年期の思想形成を遂げた劉錫鴻、郭嵩燾および王韜における文明観の変動について述べる。

一八七七年に初代出使英国大臣郭嵩燾の副使として出使した劉錫鴻（生卒年不詳、一説に一八二三年頃—一八八二年頃、一八四八年の拳人）は、英国滞在中に西洋人は「利を貪るのみ」の「夷狄」という出使前の否定的西洋認識を変化させ、西洋にも文明を見出した。ただしそれはあくまで中国文明を唯一普通の文明とする伝統的文明観を前提とし、古の「三代」の「政教風俗」を理想とする儒教的価値観を基準になされたものであり、決して西洋にそれとは異なる価値観を見出したわけではなかった。劉錫鴻は、中国が今日も聖人の「仁義の道」を維持する「中華」であると確信しつつ、「仁義の道」の教化により西洋にも「仁の端緒」や「義の端緒」があらわれ、「中華」に近づきつつあると考えていた。^②

一方、初代出使英国大臣だった郭嵩燾（一八一八—一八九一、一八四七年の進士）の場合は、出使前ですでに「三代」の「政教風俗」を理想とする伝統的文明観に照らして西洋の個々の事象を肯定的に評価し、中国では文明は失われたとする

と同時に失われた文明を西洋に見出していた。英国滞在期（一八七七―七九）にはそうした認識の延長上で、西洋の中国に対する優位への認識を一層深め、『春秋公羊伝』の中華も徳を失えば夷狄に変ずるといふ論理に依拠して、中国文明の中心が中国から西洋に移動し華夷関係が逆転したことを暗に示唆する。欧州各国の「政教風俗」を「三代」を継承するものと理解することで、西洋が中国の優位にあることを説明づけたのである。③ こうして伝統的文明観を維持しつつも西洋の中国に対する優位を強調する郭は、出使約一年後の日記で西洋の「政教風俗」を次のように述べている（以下、引用文中の自己認識のキーワードには（ ）内に原文を付す）。

（議会の）議論はただありのままに思いを告げ、隠し立てすることなく（直輸其情、無有隱避）、「中略」また人民の振る舞いもつばら真実に従い、謙遜するふりをせず（一從其実、不為謙退辭讓之虛文）、国家は法令を設け、とりわけだますことを禁じ偽りをなくすよう努め（尤務禁詐去偽）、（国民は）幼時より教育を受け、これによって自分の規範を立て、行動をひたすら誠実にしようとする（使踐履一掃誠実）。

ここには中国への言及はない。だが中国の「政教風俗」を強く批判した郭嵩燾のこうした西洋称賛は、佐々木揚がいうように中国認識の裏返しであろう。④ 後述する知識人たちの発言を見れば気づくように、ここで郭の念頭にあるのは中国における直言を避ける官僚、教育なくうわべだけ謙り詐偽の多い人民など、優位にある西洋との対比での新たな自己認識だったと考えられる。

王韜（一八二八―一八九七）は、一八四〇年代末から上海の墨海書館で宣教師メドハースト（Walker Henry Medhurst、麦都思）の助手を務め洗札を受けた。香港の英華書院にいた宣教師レッグ（James Legge 理雅各）とも親しく、一八六七年から七〇年までレッグに招かれ英国に滞在した。一八七〇年代後半には中国はもはや国際関係の一要素にすぎず、列強に対抗

するには機器だけでなく政治制度をも西洋に学ぶ「変法」が必要と考えていた。こうした王韜の経歴や認識は後述する新世代の知識人に近い。だが劉錫鴻、郭嵩燾と同世代の王韜はなお伝統的文明観の枠組みを維持しており、その意味で伝統的な知識人だった。すなわち王韜は、西洋の政治制度は中国で「失伝」した「三代以上の遺意」を継承するものと考えていた。王韜は伝統的文明観の枠内で中華⇨中国、夷狄⇨西洋という華夷関係の変更の可能性を強調したのだった。^⑤このたち位置は郭嵩燾に近い。こうした中で王韜が一八七〇年代後半から八〇年代初めに書いた『弢園文録外編』（一八八三）の諸論文には、日清戦争後の国民性批判に通じる自己認識が見出せる。例えば次のようにいう。

今中国の長ずる所はほかにない。旧習を守つて改めないこと（因循）、いい加減なこと（苟且）、隠しごとをすること（蒙蔽）、うわべを飾ること（粉飾）、欲張りて人を欺くこと（貪罔）、うぬぼれること（虚驕）、媚びへつらいを喜び直言を憎むこと（喜諛諛惡直言）、財物を好み互いに利を求めること（好貨財彼此交征利）である。^⑥

この中国人の保守性、怠惰性、虚偽性、利己性、傲慢性、卑屈性、貪欲性などの指摘は、『弢園文録外編』にしばしば見られるもので、王韜がこれらを中国人の性格として強く認識していたことがわかる。

以上、洋務運動以前に青年期の思想形成を遂げた知識人には、一八七〇年代後半から八〇年代初め、まだ文明観の転換は見出せないが、伝統的文明観の枠内での西洋の中華への接近、さらに華夷逆転という変動が見出せる。この過程で郭嵩燾や王韜には、日清戦争後の否定的な国民性認識につながる新たな自己認識がたちあらわれてくるのである。

第二節 文明観の転換と新たな自己認識——張德彝、鍾天緯、鄭觀応——

これまで見てきた知識人とは異なり、洋務運動期に西洋人との交流や新式教育の下で思想形成を遂げ、伝統的文明観か

ら相対的に自由だった新世代の知識人の中には、伝統的文明観から中西文明を異質な文明と見る新たな文明観への転換を遂げるとともに、日清戦争後の国民性批判につながる自己認識を示す者があらわれるようになる。以下、そうした事例として張徳彝、鍾天緯および鄭観応をとりあげる。

張徳彝（一八四七—一九一九）は、京師同文館（一八六二）の一期生として英国宣教師フライヤー（John Fryer、傅蘭雅）や『万国公法』を翻訳した米国宣教師マーチン（William A. P. Martin、丁韪良）らに三年間英語を学び、八度の出使を経験した。張徳彝は、初期の出使ですでに西洋中心の世界の中で伝統的文明観に依拠することの困難性を認識し、中国文明とは異質でそれより優位にある西洋文明を認めるようになる。フランスへの出使（一八七〇—七二）では、十九世紀西洋人の西洋中心の文明観に直に触れ、儒教的価値観を絶対視せず「天下各国」に固有の価値観があることを認めている。そして郭嵩燾に随行した際（一八七七—七九）の日記『四述奇』（二八八三）では、西洋人の性格を次のように述べている。

彝が四回にわたって西洋にやってきて、西洋人の性質を仔細に観察したところ、（西洋人は）はきはきしているのを喜び（喜爽直）、曖昧を憎み（悪含混）、敏捷を愛し（愛敏捷）、遅延を嫌う（厭遅延）。ものごとを議論する際には自由に主張を述べてよく（可揮洒自如）、遠慮があつてはならない（客気之話不宜有）。道理に適つてさえいれば自己の主張を通していいのだ（事既有理足伸己意）^⑧。

人はとても誠実で（頗誠実）、うわべだけ飾ることを尊ばず（不尚虚文）、職務があればその任務を成し遂げようとして怠けることはなく（終其事而不惰）、約束や命令があればそれを固く守って背かない（守其法而不渝）。是非を論じて甚だ的確であり（是非論之甚確）、利害を弁じて甚だ明晰である（利害辨之甚明）。「中略」うわべだけ丁寧を装うことをせず（不偽為殷勤）、ことさらに謙ることをしない（不故為謙讓）^⑨。

ここで張德彝は、西洋人における率直性、自由な議論の尊重、道理の重視、誠実性、勤勉性、約束の堅守、是非・利害判断の的確さなどを指摘している。これらの記述はみな中西比較の形をとらず、西洋人の性格について西洋人は（Aらしい）、（Aでない）、（Bを喜び（愛し）Aを憎む（嫌う））、（BでありAでない）などの形式で述べており、一見中国人には触れていないように見える。だが前述の王韜や後述する鍾天緯、鄭観応らの記述と対照すれば気づくように、（Aしない）（Aでない）（Aを憎む（嫌う））のAは、明らかに中国人の性格を念頭においていると考えられる。出使随員の立場にあった張德彝は郭嵩燾と同様、中国人への否定的評価を避けたのであろうが、彼は西洋人との対比で中国人に曖昧性、時間観念の欠如、自己抑制、虚偽性、怠惰性、虚飾性、卑屈性などを見出していたと考えてよいだろう。

鍾天緯（一八四〇—一九〇二）は、一八七二年から上海広方言館で米国宣教師アレン（Young J. Allen、林樂知）に三年間英語を学び、出使德国大臣李鳳苞の随員としてドイツに出使（一八八〇—八二）した。帰国後は江南製造局翻訳館でフライヤーらとともに西洋書翻訳に従事し、王韜が院長を務めていた格致書院とも関わりが深かった。鍾天緯は出使前すでに「一統の天下」は「列国の天下」に変わり「千古未曾有の局面が開け世界が一つになる兆候が現れている」と述べ、もはや華夷的秩序観によつて世界を捉えることが不可能であることを認識していた。出使期には西洋各国の繁栄の原因を探求する中で伝統的文明観からの転換を遂げ、西洋文明の優位を認め中西文明の根底に中国人と西洋人の異なる性格・価値観が存在することを認識するようになる。鍾天緯は出使期の私的な書簡「与程禧之書」で次のように述べている（引用文中の傍線部と記号については後述）。

総じていえば、（b）西洋人の性格は、動態を好み（西人之性好動）、動的であれば勤勉であり、勤勉であれば奮発し、改革することを好む（動則勤、勤則奮発、而好為更張）。（g）学問とは遅れた者が先行する者を追い越すものだと見なし、常に先人に勝つことを追求し（視学問為後來居上、往往求勝前人）、（c）旧を嫌い新を喜ぶ（厭故喜新）。「中略」その結果、人心はもとより日々活

気づき成功を収め、(e) 国勢もいながらにして強大となる(国勢亦坐成強大)。一方、(a) 中国人の性格は、静態を好み(華人之性好静)、静的であれば怠惰であり、怠惰であれば自己を抑制し、有為を憚る(静則懶、懶則自画而憚於有為)。(d) 古人には決して及ばないと考え(視古人為万不可及)、(h) 常に成法を墨守して情況にに応じて改変することを知らない(往往墨守成法、不知變通)。謙遜の美德はあるとはいえ、実は衰弱の兆しが潜んでいる(雖有謙遜之美、実伏衰弱之機)。その結果、(f) 人心は衰え国勢も振るわない(人心因之萎靡、国勢亦於焉不振¹¹⁾。

やはり出使期に書かれた「総論時勢」(二八八〇―八二)では、西洋と中国の政治のあり方を比較し、西洋では君主の権威は民意にもとづくので、議会、裁判、選挙、新聞などを通じて「国中の君臣上下を一体化する」(合通国之君臣上下)のに対し、中国では「政治上の権力が皇帝一人に独占され」(捺政柄於一人)ているので、民心はバラバラで「家毎に勝手にふるまい、人それぞれ考えが違っている」(家自為政、人各有心¹²⁾)と指摘する。

このように鍾天緯は西洋人と中国人の性格を全面的に考察し、西洋の富強と中国の衰退の原因として、西洋人における動態志向ゆえの勤勉性、積極性、革新性、進取性、進歩性を指摘するとともに、中国人における静態志向ゆえの怠惰性、消極性・自己抑制、尚古性、保守性、卑屈性、利己性を批判する。鍾天緯は、儒教的価値観とは異なる西洋人の主体的積極的なあり方を中国の富強化にも適合的な価値観として肯定的に捉えていた。

鄭観応(一八四二―一九二二)は、一八五八年に童試に失敗し上海で買弁となる。一八六八年から英華書館の夜学でフライヤーに二年間英語を学び、外国人との接触や英字新聞から西洋情報を収集する中で、時事論文を執筆するようになる¹³⁾。一八七〇年代の論文を集めた『易言』(一八八〇)では、「郡県の天下」から「華夷連属の天下」への変化を指摘し、自らを中華、周囲を夷狄と見なす華夷的秩序観を否定するとともに、「中国は万国の一つ」として万国公法の枠組みに参与することを主張した¹⁴⁾。そして一八八〇年代後半の論文をまとめた『盛世危言』(一八九四、日清戦争直前刊、五卷本)の教養篇

では、世界は狩猟段階、耕牧段階そして格致段階へと発展するとの見方を示した。鄭観応によれば、中国は耕牧段階までに「三代」の隆盛を達成し「教養の道」を確立したが後世それは衰退し、西洋はその「教養の道」を継承して農商業を発達させ格致段階に達したとされる。^⑮すなわち中国が西洋より優れていたのは耕牧段階までで、格致段階には西洋が先に到達したとして、中西文明の異質性が発展段階差（中国＝農業国家、西洋＝商業国家）と見なされていた。^⑰このような伝統的文明観からの転換により、『盛世危言』では中西比較の形式をとるかいなかに関わらず、中国文化が西洋文化を念頭に批判される。例えば、教養篇では中国人の伝統的性格が次のように指摘される。

（中国では）今日時事は日々悪い方向へすすみ、国勢は益々逼迫し、外からは強大な隣国に環視され、内では潜伏する匪賊が憂慮すべき状態にある。もしこれまで通りに旧習を守り改めず（因循）、いい加減であり（苟且）、うわべを飾り（粉飾）、人を欺き（欺蒙）、またそのうえ下心を合わせ、国を安定させるよう努め、速やかに民を教養しようとしなければ（不上下一心、力為罔治、亟行教養）、どうして後日の惨状を言うことに耐えられようか。^⑱

日報下篇ではさらに次のように述べている。

中国では古法に拘泥し（泥守古法）、忌諱することが多い（多所忌諱）。情実にとらわれ（從情面）、報復をおこない（行報復）、事実を曲げてその私図を逞しくし（深文曲筆、以逞其私図）、おもねり従うことが習慣となり（唯諾成風）、「中略」みな職務をほったらかす（皆為曠職）。故に中原の利益は開発されることはなく、民情もまた上達されず（民情亦不能上達）、告諭もまた周知されない。^⑲

典礼上篇では中国の礼儀について次のように述べている。

(中国では)そこに真心からの敬意を藏するかを問わず、ただうわべだけ謙るふりをすることをもとめるだけで(徒責其外貌卑抑之虚文)、誰もかれもうわべを飾って応接する(是相率而以偽接)。「中略」或いは表面では媚びへつらうが(或面呈巧令)、蔭では非難をほしいままにし、或いは表向きは過度に恭しくしても(或外作足恭)、心中ではそしりひどく軽蔑する。「中略」西洋の礼儀は、世俗の礼儀を軽んじおろそかにし傲慢のようであるが、しかしそのうわべだけの飾りを取り去るので(然去其虚文之偽)、必ずその真誠をありのままにあらわす(必流露其真誠)²⁴⁾。

このように鄭観応においては、中国人の伝統的な保守性、怠惰性、虚偽性、欺瞞性、卑屈性などが前述の知識人たちとほぼ同様に指摘され、さらに教育の軽視による愚昧性²⁴⁾、纏足や牢獄の残酷性²⁵⁾にも指摘が及んでいる。

以上見てきたように、日清戦争後の梁啓超に見られるような国民性認識は決して日清戦争を経てはじめて生み出されたものではなかった。それは、一八七〇年代後半から八〇年代にかけて清末の先進的知識人が伝統的文明観から転換を遂げる過程で、自らを文明化された中華の民と見なす伝統的自己認識に代わる新たな自己認識としてあらわれたものだった。こうした新たな自己認識には、知識人の文明観転換や西洋体験の程度によって一定の幅を指摘することができる。しかしそれらは総じて西洋人を肯定的に捉え、その革新性、進取性、積極性、勤勉性、誠実性、利己利他性等を指摘する一方で、中国人を否定的に捉え、その保守性、消極性、怠惰性、虚偽性、卑屈性、利己性等を批判する点で、きわめて類似しているのである。

① 「海国四説序」梁廷柅『海国四説』中華書局、一九九三年、二頁。

② 『文明観』第二章第一節、三四―四三頁。

③ 『文明観』第二章第二節、二、五六―六八頁。

④ 『郭嵩燾日記』第三卷、湖南人民出版社、一九八二年、光緒三年一

- 二月一八日、三九三頁。佐々木揚『清末中国における日本観と西洋観』東京大学出版会、二〇〇〇年、第二章、一四四、一四五頁。
- ⑤ 佐藤慎一「『清末啓蒙思想』の成立(1)(2)」(『国家学会雑誌』九二巻五・六号、一九七九年、九三巻一・二号、一九八〇年)一章、一節ⅢⅣ。
- ⑥ 王韜『設園文録外編』上海書店出版社、二〇〇二年、変法中、一一、一二頁。同様の記述は変法上、一〇頁、変法自強下、三三頁、尚簡、三八、三九頁などに見える。
- ⑦ 『文明観』第三章第二節、一〇五―一一九頁。
- ⑧ 『劉錫鴻・英軹私記』張德彝・隨使英俄記 走向世界叢書、岳麓書社、一九八六年、光緒四年一月七日、六三六頁。
- ⑨ 『劉錫鴻・英軹私記』張德彝・隨使英俄記 光緒三年九月一八日、四八九頁。
- ⑩ 『文明観』第三章第三節、一三七―一三八頁、一四二―一四七頁。
- ⑪ 「与程禧之書」鍾天緯撰『別足集』(内篇一卷、光緒二十七年(一九〇一)刻本、外篇一卷、民国二年(一九一三)女鏡美鉛印本、上海図書館蔵)外篇八三葉左。なお『別足集』内篇所収の「与程禧之書」と内容が異なる。
- ⑫ 「総論時勢」『別足集』内篇三四葉左。

第二章 宣教師の中国国民性批判

第一節 西洋近代の中国国民性認識

これまで見てきたような文明観転換にもなう新たな自己認識は、いかにして形成されたのであろうか。知識人が西洋

- ⑬ 「総論時勢」『別足集』内篇三五葉右。
- ⑭ 夏東元『鄭観応伝』修訂本、華東師範大学出版社、一九八五年、第一章六頁。
- ⑮ 佐藤慎一「鄭観応について」(1)(2)(3)『法学』四七巻四号、一九八三年、四八巻四号、一九八四年、四九巻二号、一九八五年)二「初期の枠組」。
- ⑯ 『鄭観応集』(以下『鄭』)上冊、上海人民出版社、一九八二年、『盛世危言』(以下『盛』)教養、四七九―四八一頁。なお『鄭』所収の『盛』は一八九四年刊五巻本を基礎に一九九五年刊一四巻本、一九〇〇年刊八巻本の増補部分を加えている。本稿の引用には一四巻本増補部分も含むため、その場合は引用頁教末尾に(一四巻本)と注記する。
- ⑰ 発展段階差の指摘は、佐藤「鄭観応について」四「『盛世危言』」を参照。
- ⑱ 『鄭』上冊、『盛』教養、四八一頁。
- ⑲ 『鄭』上冊、『盛』日報下、三五〇頁(一四巻本)。
- ⑳ 『鄭』上冊、『盛』典礼上、三七五、三七六頁(一四巻本)。
- ㉑ 『鄭』上冊、『盛』教養、四八〇、四八一頁。
- ㉒ 『鄭』上冊、『盛』女教、二八八頁、獄四、五〇五、五〇六頁。

人や西洋社会への観察を通じて、西洋と中国を比較検討していたことは確かであり、彼らに共通する西洋の富強、中国の衰退という情況認識からすれば、西洋人が肯定的に、中国人が否定的に捉えられたことは理解できる。しかし、彼らは西洋文明が中国文明とどのように異なるのかを模索しはじめたばかりであり、この点からすれば西洋人と中国人を比較する観点や評価の仕方はもっと多様であっていいはずであろう。にもかかわらず、知識人たちの新たな自己認識は不自然なほど類似していた。この事実は何を意味するのであるか。ここで注目されるのは、こうした新たな自己認識が西洋人の発言や新聞記事の影響を受けていた様子がしばしばうかがえることである。例えば、王韜は次のようにいう。

彼（西洋人を指す、手代木注）がかつて言った。「中国は大きいが上下ともに騙し合い（上下相蒙）、政治は賄賂によつてなされ、言うことと行われることは全く違い、おごり高ぶるが（矜誇自大）少しも中身がない（漫無實際）。朝廷は督撫に命じるけれども、督撫は必ずしもその命を実行せず「中略」（命令は 無用のものに等しく形式だけで内容のない文章とみなされる。旧習を守つて改めず（因循）、いい加減で（苟且）、うわべを飾り（粉飾）、隠蔽する（錮蔽）^①」。

ここでの「相蒙」「矜誇自大」「因循」「苟且」「粉飾」「錮蔽」など西洋人による中国人の性格への批判は、さきに見た王韜の発言と重なり彼が西洋人の発言の影響を受けていたことをうかがわせる。また鄭観応の場合も、中国人の性格への批判が「西人謂」「泰西日報嘗謂」などと西洋人によるものとして書かれることが少なくない。王韜と鄭観応は、当時としては例外的に西洋人との関わりが深く、西洋人との会話や新聞記事を通して彼らの中国人に関する言説にふれる機会は少なくともなかったに違いない。それは新式学校で宣教師に学び外国大使を経験した張德彝、鍾天緯においても同様であったであろう。それでは中国に西洋情報をもたらした十九世紀の西洋人は中国人をどう認識していたのだろうか。彼らには清末の知識人に類似した自己認識を形成させるような共通の中国認識があったのだろうか。

サイドの影響を受けて構想された周寧の研究は、西洋近代の中国認識について次のように指摘する。西洋近代は東洋と西洋、「野蛮」と「文明」という二元対立の世界観秩序の中で、中国Ⅱ野蛮という現実とは異なる虚構の幻象を構築し、中国形象を否定される他者とすることで西洋近代を「文明」によってアイデンティファイした。こうした否定的中国形象はモンテスキューにはじまり、ヒューム、ヘルダーを経てヘーゲルにおいて完成された。ヘーゲルにおいては中国国民性の本質は皇帝専制下で形成された奴性とされ、中国人は低劣・敗落であり、荣誉感がなく、自卑・自賤であり、進取・抗争がなく、軟弱で服従し、知識なく迷信し、真誠・友情がなく、陰謀・詐欺が多いなどの性格が指摘された。そしてこうした中国人の怠惰性、消極性、保守性、卑屈性、虚偽性を強調するヘーゲルの見方は、十九世紀西洋の中国国民性認識を確立するものだった^③。こうした周寧の指摘は、前述の清末知識人の自己認識を考える上できわめて示唆的である。

第二節 宣教師の漢文著作とその中国国民性批判

周寧によって明らかにされた十九世紀西洋の中国国民性認識は、宣教師を通じてアヘン戦争前後から徐々に知識人に影響を与えるようになったと考えられる。例えば、一八五〇年代初期から宣教師ハンバーク（Theodore Hamberg、韓山明）と深く関わりのちに太平天国の指導者となった洪仁玕は、『資政新篇』（一八五九）で中国人の贅沢な祭礼・儀礼、風水・迷信、纏足、賭博、奴隷売買、アヘン吸飲、あるいは連座制や酷刑を否定的に述べているが、こうした記述は十九世紀西洋の中国国民性認識の影響を受けていた可能性が大きい^④。王韜の『設園文録外編』での中国人認識も、一八四〇年代末以降の宣教師との親交の中で形成されたものと考えてよいだろう。

新たな自己認識の形成が初期において宣教師ら西洋人の発言や新聞記事からの影響を受けていたことは間違いないだろう。もっともそうした影響を受けることができたのは限られた人々であった。そうした中で新たな自己認識が知識人に広がっていくうえで大きな直接的な契機となったのは、宣教師ら西洋人により中国国民性批判の漢文著作が書かれ、それら

が宣教師によって精力的に出版・普及されたことだった。

そうした漢文著作の初期のものとして知られるのは、宣教師の著作ではなく総稅務司ハート (Sir Robert Hart, 赫德) が一八六五年に總理衙門に提出し、翌六六年ウエード (Sir Thomas F. Wade, 威妥瑪) の「新議略論」とともに地方大官に提示された「局外傍觀論」である。この「局外傍觀論」において、ハートは中国内政の実態を批判して、律例は本来よくできているが實際の運用は旧習を守って改めず (因循)、外省から赴任してきた地方官は職を全うするより私利を営む (營私) とする。また正規兵と義勇兵は千万百万とされるが實際は大半が老人弱者や愚鈍な者であり、駐防八旗の兵は外面をとり繕っているが実は怠惰 (股肱怠惰) で敵が退かねば必ず先に退く (賊如不退、兵必先退) とする。さらに文人武人の行ないはみな作り話であり (屬子虛)、法を執る者はただ利だけを はかり (惟利是視)、財を治める者は自分の都合のよいようにし (自便身家)、さらには遠くの事情は上に届かず (遠情不能上達)、上の指示も遠くまで届かない (上令不能遠行) などと指摘している。^⑤ ここであげられている「因循」「營私」「子虛」「惟利是視」「遠情不能上達」などは、すべて十九世紀西洋人の中国国民性批判のキーワードであり、その後の宣教師の漢文著作にもしばしば見られるものである。この「局外傍觀論」から刺激を受けて、一八七〇年代半ば以降、宣教師の漢文著作において中国国民性批判がより明確なかたちで展開されるようになる。あたかもそれは、文明觀轉換によって新たな自己認識の形成が知識人にとって重要な課題となる直前にあたっていた。

一九八〇年代以降、中国では清末宣教師の出版・教育などへの研究が活発化し、宣教師の漢文著作で中国国民性批判が唱えられ、清末変法論に強い影響を与えたことがさかんに指摘されるようになった。^⑦ だがその内容がいかなるもので、知識人がどのように影響を受けていたのかについては、まだまだとまった研究はみられない。以下ではまず、宣教師の漢文著作のうちにも『万国公報』掲載後に単行本化され大きな影響力があったアレンの『中西關係略論』(約七万字)、ファーバーの『自西徂東』(約二十二万字) およびアレンの『中東戰記本末』所収の「治安新策」(約四万字) について、中国国民

性批判の内容を明らかにする。

(1) アレン『中西関係略論』

『万国公報』の編集者として知られるアレンは、アメリカカ監理会の宣教師として一八六〇年上海に赴く。上海への航海では、フランス人宣教師ユック（Evariste Régis Huc, 古伯察）の『中国滞在記』『中華帝国』（L'Empire chinois, 1854）の英訳本を読み、その中国認識の影響を受けている。当初アレンの布教は、街頭での説教と小冊子の配布という伝統的なものであった。だがアレンは上海広方言館で英語や西洋科学を教えまた洋務派官僚と接触する中で、中国人の西洋科学への関心の高さを知り、中国人の非合理的部分を批判し科学知識をはじめ西洋文明の成果を示すことが、キリスト教の布教に有効であることを発見する。清末の宣教師の著作にはしばしば中西比較を通じて中国改革を説く議論が見られるが、こうしたスタイルの発明はアレンに負うところが大きいと考えられる。こうした中でアレンは、一八七五年から翌年にかけて『万国公報』に『中西関係略論』を発表した。後述する『自西徂東』の中国国民性批判がきわめて多岐にわたる観点から展開され、十九世紀西洋の中国認識の蓄積を反映していたのに対し、『中西関係略論』の中国国民性批判は徐維則が「頗るよく奥深く精微なところ（奥窔）をついている」と評するように、中国国民性の根本にある問題を捉えようとする意図が強く感じられる。『中西関係略論』においてアレンは、西洋人が中国へやってきた目的は中国の通商にあり、それ故に中国が通商の障害を除き改革により富強化することを望むのだとする。そして中国人が西洋の科学技術とキリスト教に依拠して、農業、工業、商業を西洋に倣って改革することを提唱する。十九世紀西洋人の中国国民性認識を自らの観察眼によって深化させた中国国民性批判は、こうした議論の中で次のように述べられる。

(A) 東洋人は静態を好み動態を好まない（東人好静不好動）。だから彼らの嗜好品は平静をもたらすものがこのまれ、精神を平静

にすることが尊ばれる。「中略」何事も先入観にとらわれ（凡事狃於成見）、生涯昔の規則を改めず（終其身不改旧章）、また生涯人の下位に留まる（亦終其身而居人下）。その影響は、どうして小さいであろうか。（B）西洋人は動態を好み静態を好まない（西人好動不好静）。だから彼らの嗜好品は刺激があるものを主とし、精神の発揚が尊ばれる。「中略」何事も最もすすんで先を争い（凡事最肯争先）、わずかの間に新法に改め（閱一時而更新法）、ついにわずかの間に人の上に出る（遂閱一時而出人頭地）。その人に勝ることはどうして大でなからうか。¹³⁾

（C）外国では昔を赤ん坊のように見なし、今を成人のように見なす（外国視古昔如孩提、視今時如成人）。（D）中国では古を最上とし、今を劣るとする（中国以古初為無加、以今時為不及）。だから（E）西国は隆盛を極めて衰えず（西国有盛而無衰）、（F）中国は常に衰え振るわない（中国每頹而不振）。（G）西洋では万事先を争い落後に甘んじないが（西国万事争先、不甘落後）、（H）中国では既定の決まりを墨守し改善することを知らない（中国墨守成規、不知善變）。これが中国の貧弱の原因である。¹⁴⁾

このようにアレンは西洋人の動態志向とそれゆえの積極性、進取性、革新性、勤勉性と対比しつつ、中国人の静態志向とそれゆえの消極性、尚古性、保守性、怠惰性を指摘している。

（2）ファーバー『自西徂東』

ファーバー (Ernst Faber、花之安) は一八五八年、ドイツにおける中国へのプロテスタント布教のための組織礼賢会に参加し、一八六五年に香港に至り、一八六六年広東の東莞で布教活動を開始する。一八八四年には上海に移り一八九九年青島で死去した。著名な漢学家であり儒教思想の知識を駆使した漢文著作を通じて布教に従事した。¹⁵⁾

『自西徂東』は、一八七九年から八三年に『万国公報』に掲載された論文をまとめて五集（巻）七二章とし、八四年香

港で出版された。題名の「自西徂東」（西から東へ）は『詩経』大雅、桑柔からとられている。フアーバーはこの著作で長年の中国での観察および西洋文化全般への広く深い知識をもとに、中西の政治、経済、軍事、教育、学術、技術、風俗、道徳、宗教、儀礼祭祀などを比較検討し、中国の衰退と西洋の富強の根底にある中西国民性の相違を指摘するとともに、西洋に学ぶ改革を推進すべきこと、それにはキリスト教の受容が不可欠なことを強調する。キリスト教のもとに形成された西洋文化の優位性を示すことで中国のキリスト教化を目指す姿勢は、アレンと軌を一にする。『自西徂東』は、西洋文化に関する膨大な情報を提供するとともに、十九世紀西洋人の中国国民性認識を反映する多岐にわたる中国国民性批判を展開しており、後述する普及状況を考え合わせると清末の官僚・知識人への影響は大きかったと考えられる。そのわりに肯定的な評価がほとんど見られないのは、各章でキリスト教受容の必要性が繰り返し説かれるためであろう。

表Ⅰは、『自西徂東』での中西国民性認識の概要を示したものである。紙幅の都合で全七二章のうち中西国民性認識の主要な内容を取り上げる三四章について、そのキーワードおよび要旨を示した。『自西徂東』での中西国民性認識は、『中西関係略論』のように短い文章に凝縮した形で示されてはならず、キーワードは筆者が各章の原文中から中西国民性認識を象徴する対義語（例えば四章の「無教」と「重教」、八章の「酷虐」と「体恤」など）を抽出したものであり、対義語が複数組の場合もある。また要旨は各章の内容をごく簡潔にまとめたものである。各章に共通する章末のキリスト教受容の勧めは省略した。キーワードと要旨をあわせて見れば、各章の内容はある程度把握できよう。

表Ⅰに示されるように、『自西徂東』においては多様な観点から中西国民性の対比が展開されており、その代表的キーワードを示せば、上記のほか七章の「柔弱」と「強壯」、「好静」と「好動」、一九章の「利己」と「利己利人」、二一章の「貪婪」と「清心寡欲」、「懶惰」と「辛勤養家」、三二章の「虚文」と「真誠」、「虚假」と「実心」、三三章の「自高」と「謙和」、「自卑」と「真实」、三八章の「信風水」と「究物理」、四四章の「不潔」と「清潔」、五二章の「上下隔絶」と「通上下之情」、五五章の「固執成法」と「精心思索」、六一章の「今不及古」と「今勝於古」などがあげられる。周寧に

31	凶礼は中庸を貴べ	今日中国の喪礼は外見だけ飾り贅沢であるが、西国は喪葬に浪費しない。己が善をなせば、死後イエスが天に昇らせてくれるからである。天災は上帝の人への警告であり、中国での天災時の祭祀・偶像崇拝は無益である。西国人は誠意をもって災害を予防・救援し、天災を求めない。	虚文 虚假	真誠 実心
33	賓礼は敬意を示せ	中国人は賓客に傲慢すぎるが卑下しすぎて敬意を失う。西国の接客は敬意を主とし、礼は同輩には身を正し頭を下げ、目上の者にはさらに慎み深く頭を下げる。人の行礼は己を慎み高ぶらずおもねらずに行えば中道を得られる。	自高 自卑	謙和 真実
34	軍礼は威権を示せ	中国の軍隊は世襲や軍功を重んじ、将兵は武器や戦法に精通せず、恐れて前に進まない。西国の軍隊は君王から衣食を受けており、忠を尽くし力を竭し心力を合わせ君を愛し国を衛らねばならない。	畏莫 莫前	愛君 衛国
35	楽で礼をすくえ	中国音楽は二弦は淫靡、琵琶は軽浮で淫心蕩志を興させ至美とはいえず、音楽の奥深さを知る者はない。西国の音楽は人に善心を興させることを貴び、書院・礼拝堂では人々に合唱を教え、人はみな平穏を得る。	淫靡 軽浮	至美 和平
37	原質を保つを貴べ	古の中国は内面美を重んじたが、今日婦女は外飾を誇り纏足を好む。西国男女も外飾を重んじるが、イエスに遵う者は服飾器用の質朴を貴ぶ。	粧飾	質朴
38	風水を弁論す	中国では風水を信じ開鉱・鉄道を背んじないが、泰西では風水を信じず開鉱・鉄道による利益は計り知れない。西人は物理を究め理に依拠するので繁榮するが、華人は虚假を好むので繁榮を貪るが反って衰敗する。	信風水	究物理
39	齊家は修身にあり	中国では納妾の風により夫婦の道は失われた。泰西のキリスト教を信じる夫婦に不和はない。泰西では男女は成人後に合意により結婚するが、中国ではすべて父母の主持により多くは童年に婚約するため夫婦に不和が多い。	婚嫁全憑 父母主持	男女歡悅 然後成婚
42	言語を慎しめ	中国人は嘘をついて欺き、誇張して自慢し、誓ってもすぐ翻し、少しも誠実でない。だがでたためを言う者に世人は反って追従する。泰西のキリスト教徒は嘘をついて人を騙さず、非礼の言を人前で述べない。	詭言詐人	務善言
43	心に詐偽を防げ	中国では詐偽が多く、上に在る者は誠意がなく部下は互いに悪事をまね民は詐偽を競う。泰西では嘘を言う者は中国ほどひどくなく、役人は偽らず商人は忠信を高め職人は偽物を作らない。華人が詐偽をなくせば中国は外侮を受けない。	詐偽多	詐偽少
44	内外を清潔にせよ	人の清潔さは上帝の聖潔さに従う。中国では街頭の男女は身体衣服が不潔で、街道は生ごみだらけ、廟宇・祠堂の神像・木主は垢まみれた。泰西の人は心が明潔で身体・衣裳は清潔にし、礼拝堂・学校には塵一つない。みな心が清潔だからそれが外にあらわれるのだ。	不潔	清潔
48	学問は原を採れ	西国の学問は格物に帰するものが多く、人々が信じられる証拠がなければならず、一理に帰することを貴び、混乱して無条理となることがない。宋儒の性理説を重んじる中国の学問は粗浅な功績だけを求め精深な理を失っている。	得粗淺 失精深	依実濟 徵信
50	教化について	中国の科擧は能力を無理にそろえ人材を無駄にする。西国では各人の能力に応じて教育し、職を得ない者、役立たない者はいない。	恃八股	因材施教
52	新聞について	中国は上下隔絶し、朝廷の是非得失は分からない。西国は新聞で下情を上達し民の疾苦を伝え、上諭を下告し政事を隠蔽せず、新聞館の立論は公正、議論は妥当で権勢を避けず悪党を畏れない。	上下隔絶	通上下之 情
54	機器を利用せよ	機器は古の中国に始まるが、今日中国人は「今は古に及ばず」といふ変通を知らず、格物の理を失い機器を民用に供せない。西人はよく機器を用い、心は機器を用いるほど働き智慧は古人を乗り越えている。水力火力を使う機器が広く用いられ、民は省力し国と民は富を得ている。	今不及古	駕于古人 之上
55	技芸と工作を別けよ	華人は成法に固執し古人を至善とし、技芸を磨かず新巧の機器を発明できない。西国では学問を究めて新巧の機器を発明し、その模倣を10年禁じ発明の利益を守るので、西人はさらに発明に励む。	固執成法	精心思索
56	開礦して国を富ませよ	中国は五金以外採掘しないが、泰西は資源を研究し五金以外も採掘し国を富ませた。中国は利国利民のために君臣協力して民間の出資を求めて格物の学を考究して開礦の利を尽くすべきだ。	視開礦為 具文	知礦之利 無窮
59	武備を創出せよ	今中国では外国の軍器はあるが、兵は軟弱で大将は智勇に劣る。泰西では武学院で天文、地理等の高度な兵法を学んだ聡明で武備に通じた者でなければ、総統・將軍になれない。	孱弱	智勇兼優
60	医術を精究せよ	泰西の医学は死者を解剖しその実を得るが、中国には実学がなく医書も臆説が多い。西医は脈だけでなく患者の形色音声を観察し経過を問うので、診断は大きく外れず、器具・用薬も中国よりずっと精巧である。	無実学 多臆度	徵信 得其実
61	格物の功用	格物の学は万物を考察し物理を究め、物を用いて人に役立てる。西国では格物の学が深化し精妙な機器が発明されたが、中国は今人の智慧は古人に及ばないとし物を考察することを知らず、その無知に気づかない。	今不及古	今勝于古

表 I 『自西徂東』における中西国民性比較

章	題目	中西国民性比較の要旨	国民性のキーワード	
			中国	西洋
1	遍く窮民を救え	中国各省には養濟院があり身寄りのない者を取容するが、養うだけで仕事を教えず国費を浪費する。西洋各都市の貧民救済施設は、貧民を援助し、身寄りのない者には衣食を与え能力に応じて仕事を教えるので、国費を浪費しない。また自ら貧困を招いた少壮者は救済せず前非を徹底的に改めさせる。	養之而不教之	教之作工
4	孤児を撫教せよ	中国では生涯の教育を忘れ目前の養育だけを重んじ、孤児はそれが著しい。泰西では孤児の養育・教育者を決め、引取り手がいない者は孤児院で養育・教育する。孤児院は勉学のほか工芸、裁縫・調理を教え職業を紹介し、出院後も指導する。	無教	重教
7	刑罰を省け	中国の刑罰はますます残忍だが罪人はいよいよ多い。西国には酷刑はなく罰金刑、坐獄刑、徒刑、死刑のみで、近年死刑廃止の動きもある。西人は強壯で動態を好み、華人が柔弱で静態を好むのに比べて治め難い。その西人が輕刑を用いるのに、華人は輕刑を用いてはならないとはどういうことか。	酷濫柔弱好靜	無酷刑強壯好動
8	獄囚に同情せよ	中国は獄囚の扱いが酷虐で、訴訟は長びき審判は不公正で、罪の大小を問わず過度に監禁し、監獄は不潔で獄吏は冷酷である。泰西の訴訟審理は法を守り罪人の立場で考え、罪が決まれば法で年限を限り、能力や罪の軽重により働かせる。また獄吏は情が深く、少壮者には教育を施し、監獄は清潔である。	酷虐	体恤
9	戦争を調停せよ	中国の古の先王は戦争をやめ文徳を修めたが、後世は競ってあくまで争おうとして領土を拡張してきた。今日西国は道理で論し合い戦争を避けるよう努め、戦争時には宣戰布告、捕虜の保護、略奪の禁止などのルールがある。また近年西国では道理のない侵略戦争への批判が強まっている。	競欲力争	調和息争
14	国財を慎理せよ	中国では官吏が公金で私腹を肥やし、朝廷や各省の経費は多いが実惠なく民は浪費が甚だしい。泰西は農耕・畜産、生産の機械化、鉱山開発により財を生む。徴税は公平を期し、再徴税は議会で再度議論する。民は進んで協力し官吏に不正はなく、国財の管理が適切で欠乏しない。	暗侵公項民奢致貧	取財公允生財太多
18	関税を整理せよ	中国では厘金の徴収、役人の強奪により、関税が本旨を逸脱し民を損なっている。西国では税吏の不正は罰せられ、税は品物により定められ、税関は多くない。また西国は相互に税務を公平に定め、日用品の税は軽く再課税せず、贅沢品の税は重くして財を浪費する品物を減らし財を生む品物を増やしている。	貪酷顧私	貴公平
19	利息を軽くせよ	中国人は貪欲で、自分だけ肥え太り他人を害し、貧民は困窮する。西国では借金の利息は軽く借りやすく回収しやすい。金持ちは相手を信用すれば利息を軽くし、人の善心を興すことを喜び私欲を恣にしない。	利己	利己利人
20	奢侈を戒めよ	中国では官民とも奢侈を好み質実を崇べず、祭祀、祈禱、酒樓、賭場で散財する。西国は財を生み財を用いることに優れ、利を興し害を除き、貿易や商売に巧みで、機器を創造するのに優れ、苦勞を辞せず努力する。衣食は質素で外観より才徳を重んじ、皇帝から官吏まで給与は決まっている。	奢侈虚糜	生財有道用財有方
21	賭博を禁じよ	賭博は人性の貪欲、怠惰により、中国人は暇があれば賭博に耽り禍は際限がない。西国のキリスト教徒は心を清らかにし欲情をすて、賭け事をせず家族を養うのに精を出す。競馬、球技は体をリラックスさせるもので賭博ではない。また西国の大花園には鳥獸、器物があり、書籍の備えがあり人々を楽しむ。	貪婪懶惰	清心寡欲辛勤養家
23	奴婢売買を禁じよ	中国の金持ちは奴婢を買い貧民は子女を売る。今日泰西では英国、米国で黒奴が解放され奴婢売買は厳禁されている。贅沢を改め雇用人を使えば奴婢売買はなくせる。今中国人は給与が多い海外で雇用されているが、廉恥心がなく安価で現地人を圧迫するので西人に軽視されている。	購買奴婢販鬻子女	嚴禁売買奴婢
24	民盛ならば国強し	中国では民を教え養う道が失われ、早婚で子は虚弱、戦乱で民は流出し、盜賊・乞食も多い。西人のように男女とも幼児から学校で学ばせるべきだ。西洋は民が国と繋がることを知る故に、民にその本性を遂げさせ、民の職業を安定させ、民を学に努めさせ、民の利を興し害を除くことに委曲を尽くす。	教養之失其道	男女從幼教之
25	溺女を禁じよ	中国では父母が怠惰で女兒を溺殺し胎児を墮胎する。ドイツでは子女は同様に養育・教育し7、8歳で学校に入れる。結婚は男女の合意により、夫婦は互いに訴えることができ、女子は婚後も親の遺産を兄弟と均分する。	重子輕女	男女無分
27	道義と権力を識別せよ	中国の君主は権力を私し公にしないので、人心は従わない。泰西では人君は権力で官民を強迫しない。罪は刑官が法により罰し、君主に疑惑があれば役人が調べ、兵權は民が拒めば徴収できず、法律は議회가認めねば決められない。中国と違い父母は子女を鞭打つがそれが行き過ぎると罰せられ、成人して収入を得れば奪わず、子女は父母を誠実に世話し、夫婦は対等である。	私權	不過用權
29	万国公法について	中国に万国公法はなかった。西国はキリスト教が万国を一家と見なし、外交を仁義に帰することを貴び、公法を作った。公法は平和息兵を論じ、外交ルール、公使領事の役割、交際儀礼、船舶航行ルール、戦時捕虜の扱いや講和交渉を定める。万国が公法に拠れば力を合わせられる。		万国一家貴婦仁義

よって十九世紀西洋の中国国民性認識を確立したとされるヘーゲルにおける中国人の怠惰性、軟弱性、消極性、愚昧性、保守性、利己性、卑屈性、虚偽性等を強調する見方はほとんどここに含まれている。

(3) アレン「治安新策」

一八九六年、アレンはすでに『万国公報』に掲載された日清戦争関係の日中双方の資料や自らの変法への提言「治安新策」を一書にまとめ、「中東戦紀本末」八卷（八冊）として刊行する。この書は、中国報紙が伝えなかつた戦争の真実を伝えるものとして官僚・知識人の大反響を巻き起こす。「治安新策」（『万国公報』八二―八八冊、原題「險語対」、蔡爾康訳）は、冒頭で日清戦争の敗因となった国民性を西洋との対比で論じている。ここでアレンは中国の八つの国民性を「一曰驕傲。……」「一曰愚蠢。……」という形で暴露し批判を展開しており、この従来にない形式自体が当時のアレンにおける中国国民性批判の一層の高揚をものがたる。次にその要旨を簡潔に示す。

- ① 驕傲。中国の声明文物が周囲の夷狄に優位を占める中で醸成された「尊己輕人の弊」は今日もそのままである。
- ② 愚蠢。西洋の名門は男女とも学校で学び皆中国を知るが、華人は海外の地を知らず、西人は遍く地上を探検するが、華人は詩文に潜心するだけだ。
- ③ 恇怯。西人は格物の学により光、電、風、火を利用するが、華人は自然の災害に遇っても恐れるだけだ。
- ④ 欺誑。泰西は嘘を戒めるが、華人は嘘を当然とし公文書も私信も嘘だらけ、人を欺き人に欺かれるのを楽しむ。
- ⑤ 暴虐。中国の刑具は残虐で軍隊は兵士を軽んじ治療せず降伏した敵も殺すが、西洋は敵味方なく医薬を施す。
- ⑥ 貪私。中国の督撫は京師が危険でも手を出さず自分の領域のみ顧み、將校は士卒の給料で私腹を肥やす。
- ⑦ 因循。華人は勝手に行ない自由に休み出来ないことは先に延ばし、国家も旧習を改めないのを禁じない。

⑧遊惰。西人は六日勤勉に働き一日休むが、中国の役人は年中休まず苦勞するようである。毎日暇である。¹⁸⁾

「治安新策」における以上の中国国民性批判は、『中西關係略論』『自西徂東』における中国国民性認識から日清戦争での主要な敗因を抽出したものであったが、従来の認識に見られた消極性、保守性、愚昧性、怠惰性、利己性、虚偽性、傲慢性、残虐性などはここにも含まれている。

第三節 宣教師の漢文著作の出版・普及状況

以上の中国国民性批判の漢文著作は、中国の西洋化、キリスト教化を鼓吹するための最重要文献として宣教師によって官僚・知識人の間に精力的に普及された。その普及を担ったのは「局外傍観論」「中西關係略論」「自西徂東」そして「治安新策」のすべてが掲載された『万国公報』であった。『万国公報』は、一八七四年にアレンによって従来の『教会新報』（一八六八年刊）を改称して刊行され（週刊、八三年停刊。八九年広学会の月刊機関誌として復刊、一九〇七年廃刊）、キリスト教教義のほか中外時事、西洋學術文化など豊富な西洋情報を提供しつつ西洋に倣う中国改革を提唱した。『万国公報』こそは、出使経験者を含む知識人にとって日清戦争前最大の西洋情報源だったといつて過言ではない。

監理会資料やアレンの書簡をふまえ『万国公報』を詳細に研究したベネットによれば、『万国公報』の当初の発行部数は毎期約二千部だったとされる。またアレンが中国の代理商は雑誌の売値の半分か四分の一で雑誌を貸し出しており、しかも通常は二名から四名で雑誌一部を定期購読していると述べていることから、アレンは実際の読者数は発行部数よりはるかに多いと見ていたとも指摘している。¹⁹⁾『万国公報』の発行部数はその後不断增加し、一八九四年に四千部、九七年には五千部に達したという。²⁰⁾またベネットによれば、アレンは『万国公報』刊行当初から高級官僚への普及を特に重視していた。一八七四年九月の娘への書簡では「ほとんど北京と東京の全ての官員の名簿をもち、定期的に彼らに『万国公

報』を送っている」と述べている。一八七五年のある書簡では、そうした取組みの結果、中国の各省市から朝廷に上奏される奏折は、多くの場合ほとんど一字一句『万国公報』の内容を引用していると指摘し、一八七六年二月の書簡では「『万国公報』は北京で非常に歓迎され、彼らは外国人が刊行するもつともよい中文刊物と称しており、恭親王は先頭に立ってこの雑誌を称賛した」と述べている。²¹⁾

前述の宣教師の漢文著作のうち『中西関係略論』は、『万国公報』掲載後一八七六年に単行本が出され九二年には重印された。²²⁾ これをはるかに上回って普及したのが、『万国公報』掲載後に単行本化された『自西徂東』と『中東戦紀本末』だった。ウイリアムソンら宣教師を中心に上海で組織された西洋文化紹介のための出版機構だった広学会（一八八七設立、初名は同文書会）が、両書の普及を精力的に展開したのである。次に広学会の年報から関係記事を摘録する。

一八八七年一月～八八年一〇月：『自西徂東』（二七卷）を二万七千部重印。同書一万部を南京の宣教師に送り郷試受験生に配布。²³⁾

一八八八年一月～八九年一〇月：三二種の『自西徂東』（章別の分冊か？手代木注）を発行。杭州の宣教師に『自西徂東』（第六章、第六三章合訂本）一千部を安価で提供。²⁴⁾

一八九〇年一月～九一年一〇月：広州、杭州、濟南、武昌、南京、北京、太原の科挙試験会場で『自西徂東』『格物探源』『格知新機』等数千部を配布。²⁵⁾

一八九一年一月～九二年一〇月：『自西徂東』の数章を単行本として重印。²⁶⁾

一八九二年一月～九三年一〇月：『自西徂東』（五卷）を重印二千部、高級官員に一人一部贈送。²⁷⁾

一八九三年一月～九四年一〇月：克郎茲牧師 (Rev. P. Kranz) が『自西徂東』を高級官員に配布。²⁸⁾

一八九五年一月～九六年一〇月：特に『泰西新史攬要』と『中東戦紀本末』を全国各地に普及。『中東戦紀本末』（八冊集、附録『文学輿国策』二冊集、計十冊集）は刊行半年足らずで出版費用を回収、初版三千部（八冊集）

を完完。²⁹⁾

一八九六年一月〜九七年一〇月…『中東戦紀本末』八冊集、二千部重版、さらに同書一四冊（八冊集および『文学興国策』等）合訂本、四千部を出版。³⁰⁾

一八九七年一月〜九八年二月…光緒帝が購入した西学書二九種の注文リスト中、『自西徂東』は一番目、『中東戦紀本末』は五八番目に挙げられ、広学会書籍は八九種が含まれていた。『中東戦紀本末』第一集（八冊集か？手代木注）、千五百部再版、『中東戦紀本末』全集（一四冊集か？手代木注）、五千部再版。³¹⁾

一八九九年一月〜二月…『自西徂東』千部重版。³²⁾

一九〇〇年一月〜九月…『中東戦紀本末』三編、千五百部重版。³³⁾

記事中の出版部数を合計すると、『自西徂東』は一八八七年以降少なくとも三万一千部（ただし二七巻本、五巻本や章毎の冊子など多様な版本を含む）重版され、『中東戦紀本末』は一八九六年以降少なくとも一万七千部（ただし八冊集、一四冊集、三編などを含む）が出版されたことがわかる。このように広学会は、設立から日清戦争までは『自西徂東』、日清戦争以降一九〇〇年までは『中東戦紀本末』の普及に精力的に取り組んでいた。こうした状況は中国国民性批判を展開した『自西徂東』と『治安新策』が、当時の知識人にとって身近さという点でも際立った存在だったことを示している。

① 「西人重日軽華」王韜『設園文録外編』一〇八頁。

② 『鄭』上冊、『盛』議院上、三一五（一四巻本、吏治下、三三三頁）。

③ 周寧『天朝遙遠—西方的中国形象研究』上下巻、北京大学出版社、

二〇〇六年、特に第六編第三章。関連する研究として大野英二郎『停滞の帝国—近代西洋における中国像の変遷』国書刊行会、二〇一一年。

④ 「資政新篇」「太平天国印書」下冊、江蘇人民出版社、一九七九年所収。また『新編原典中国近代思想史』第一巻、岩波書店、二〇一〇年

所収の小島晋治訳（倉田明子改訳）および倉田明子『中国近代開港場とキリスト教』東京大学出版会、二〇一四年を参照。後述の『自西徂東』（表I参照）には類似する記述が少なくない。なお倉田前掲書第一章や宋莉華著、鈴木陽一監訳、青木萌訳『宣教師漢文小説の研究』東方書店、二〇一七年、第四章は初期宣教師モリソン、ギュツラフらの中国国民性に関する発言に言及している。

⑤ 「局外傍觀論」李天綱編校『万国公報文選』生活読書新知三聯書店、

一九九八年所収。『新編原典中国近代思想史』第一巻所収の茂木敏夫訳を参照。

⑥ 『局外傍観論』は「新義論略」とともにアレンによって一八九九年から七〇年に『教会新報』に掲載され、次いで『万国公報』に『中西関係略論』の附録として掲載された。さらに同書の単行本にも収録され広く普及した。

⑦ 熊月之『西学東漸与晚清社会』修訂版、中国人民大学出版社、二〇一一年、王立新『美国传教士与晚清中国现代化』天津人民出版社、一九九七年、王林『西学与变法』齐鲁书社、二〇〇四年など。また先駆的研究として王樹槐『外人与戊戌变法』台湾中央研究院近代史研究所集刊、一九六五年がある。

⑧ アレンについては Adrian A. Bennett, *Missionary Journalist in China, Young J. Allen and His Magazines, 1860-1883*, The University of Georgia Press, Athens, 1983. [美] 貝奈特著、金瑩訳『伝教士新聞工作者在中国—林樂知和他的雜誌(1860-1883)』広西師範大学出版社、二〇一四年)および梁元生『林樂知在華事業与『万国公報』』香港中文大学出版社、一九七八年を参照。

⑨ Bennett, *Missionary Journalist in China*, p. 14.

⑩ Bennett, *Missionary Journalist in China*, p. 38.

⑪ 『東西学書録』(一八九九年、上海図書館蔵) 議論第三〇、三七葉。

⑫ 『中西関係略論』(以下『略論』、光緒二年孟秋中浣刊、鉛印、全四巻、上海図書館蔵) 論中外交接宜如何聯絡如何維持、論天道之学、総結前論、論謀富之法。

⑬ 『略論』論鴉片烟之害、二七葉右。なお『略論』総結前論、二九葉左では「華人好静不好動」という。

⑭ 『略論』論中外交接其聯絡維持之法究竟如何辦理、一〇葉左。

⑮ 張頌『漢学家花之安思想研究』知識産権出版社、二〇一三年、第一

章、三頁。

⑯ 徐維則は「其弁論義理頗有精微之処」とする一方「惟教語可厭」と述べ(『東西学書録』議論第三〇、三八葉右、梁啓超も「粗淺」と評する(『西学書目表』一八九六年、時務報館代印、東北大学図書館蔵、西学書目表下、一五葉右)。

⑰ 『同文書会年報』(以下『同』)第八次、『出版史料』(上海、学林出版社)一九九〇年一期、八八頁左。

⑱ 『中東戦紀本末』(美国林樂知著訳、蔡爾康纂輯、全八巻(四冊)近代中国史料叢刊続刊、第七一輯、文海出版社、一九八〇年)巻之八「治安新策」上之上、二葉左、四葉左。

⑲ Bennett, *Missionary Journalist in China*, p. 143, 144, 253.

⑳ 王林前掲書四四、四五頁、熊月之前掲書三二五頁。

㉑ Bennett, *Missionary Journalist in China*, p. 145. 万国公報の普及については王林前掲書四五—五〇頁にも詳しく。

㉒ 熊月之前掲書四九五、四九七頁。なお郭嵩燾は英国でアレンに会い同書を称賛している。『文明鏡』一七四頁。

㉓ 『同』第一号、『出版史料』一九八八年二期、二五頁右、二六頁左。

㉔ 『同』第二号、『出版史料』一九八八年二期、二七頁右、二八頁左。

㉕ 『同』第四号、『出版史料』一九八八年三・四期、六二頁右。

㉖ 『同』第五次、『出版史料』一九八九年二期、三三頁右。

㉗ 『同』第六号、『出版史料』一九八九年二期、四九頁左。

㉘ 『同』第七年、『出版史料』一九八九年三・四期、七三頁右。

㉙ 『広学会年報』(以下『広』)第九次、『出版史料』一九九〇年三期、四九頁右。

㉚ 『広』第一〇次、『出版史料』一九九一年二期、八〇頁。

㉛ 『広』第一次、『出版史料』一九九二年一期、四八、四九、五四、五五頁。

③② 『広』第二次、『出版史料』一九九二年二期、一〇五頁左。

③③ 『広』第三次、『出版史料』一九九二年四期、六五頁左、七五頁左。

第三章 宣教師の中国国民性批判の知識人への影響

以上、文明観転換にともなう新たな自己認識の形成にやや先行して、宣教師の漢文著作で中国人の保守性、消極性、怠惰性、利己性、欺瞞性、卑屈性等が強調されはじめ、しかもその漢文著作が宣教師によってきわめて精力的に普及されたことを述べてきた。それでは宣教師の漢文著作から知識人はどのように影響を受けていたのだろうか。

表Ⅱは、宣教師（ただしハートを含む）と知識人の中西国民性認識を対照できるようにしたものである。知識人に見られた中西国民性認識は、宣教師のその範囲にはほぼ収まっており、宣教師と異なる観点からの認識はほとんど見出せない。そこで表Ⅱでは、中西国民性認識の共通項として、最も多岐にわたる認識が見られる『自西徂東』から他の宣教師や知識人にも見出せる主要な認識を選んで最左列A～Pに配した。ただしその表記には『自西徂東』における中西国民性認識のキーワードではなく、読者にわかりやすい一般的表現を用いた。最上行には宣教師と知識人の著作を刊行順（鍾天緯の著作は執筆時期）に配し、各著作の下欄では各著作に共通項A～Pに示した中西国民性認識と同内容の認識が見出せる場合、その認識がいかなるキーワードで示されるかを記した（キーワードは代表的なもののみあげた。例えば、共通項Aにおける中国人の「傲慢」は、『改園文録外篇』では「矜誇」・「虚驕」、『自西徂東』では「自高」と表現される。各欄の上段は中国人、下段は西洋人の性格を示す。各欄の下段が―となっているのは西洋人に関する記述がないことを示すが、その場合も多くは西洋人との対比で中国人の性格が認識されている。

そこで表Ⅱをみると、知識人のいくつかの著作における認識には、先行する宣教師の著作との間に少なからぬ類似が見出せる。勿論、知識人はほかの漢文著作等からも情報を得ていたであろう。だが本稿で論じた宣教師の著作はいわば当時の超ベストセラーであり、知識人たちも当然読んでいたと考えられる。従って、彼らの著作がその直接の影響を受けてい

表 II 中西国民性認識対照表

	国民性認識 共通項	ハート 「局外傍觀論」	アレン 「中西關係略論」	鍾天錫「總論時勢」 「与程翰之書」	王綱「聖園文 錄外篇」	張德華 「四述奇」	フエーバー 「自西徂東」	鄭觀應 「盛世危言」	アレン 「治安新策」	梁啟超「中國 弱源論」
A	(中) 傲慢 (西) 謙虛	欲輕人(欲服人)			矜誇, 虛驕		自高 謙和	驕傲 ——	女性	
B	(中) 卑屈 (西) 威美	——		雖有謙遜美伏衰弱	喜實強	為為壓勸 伸己意	自卑 真美	唯諾, 巧令 真誠, 教養有道	愚蠢 ——	——
C	(中) 愚昧 (西) 有能	愚蠢	—— 男女讀書識字		——	無不通文墨 講風水 務実学	教養之失其道 男女從幼教之	教養有道	愚蠢 男女讀書	愚昧 男女入学
D	(中) 迷信 (西) 科学	——	以風水為可惡 取電氣而云信	高義理之空談 得物理之實際			尊風水, 多態度 得其美, 究物理	教養有道	愚蠢 惟法	——
E	(中) 貪欲 (西) 寡欲	惟利是規			貪倭 少貪倭	貪醜, 貪婪 清心寡欲	貪醜, 貪婪	貪婪		
F	(中) 利己 (西) 利己利人	營私	顧己, 各自為謀	家自為救 齐心併志		顧一己之私, 利 己利己利人	各自為計	營私	為我 愛他利他	
G	(中) 殘虐 (西) 慈愛	——				酷虐 体恤	殘忍	暴虐 愛人如己		
H	(中) 虛偽 (西) 真美	尺蠖子虛			蒙蔽	尚虛文 願誠実	虛假, 詐偽 真誠	深文曲筆, 欺蒙	好偽	好偽
I	(中) 軟弱 (西) 強壯	賊不退兵先退					柔弱, 畏葸莫前 強壯, 愛國衛君	非潰即逃	懦弱 勇壯	懦弱 勇壯
J	(中) 消極 (西) 積極	——	好靜 好動	好靜 好動	溺於晏安		好靜 好動	——	無動	無動
K	(中) 保守 (西) 改革	因循	墨守成規 勇爭先	墨守成法 求勝則人	因循		固執成法 精心思索	因循, 墨守旧章	因循	因循
L	(中) 尚古 (西) 進歩	——	以古初為無加 視古昔如孩提	視古人為万不可及 視學問為後來居上			今不及古 今勝於古	——	——	——
M	(中) 怠惰 (西) 勤勉	怠惰		懶, 自画 勤, 奮発	苟且, 訥濁	怠惰, 遲延 不惰, 敏捷	懶惰 辛勤養家	曠職, 遊手好閑	怠惰 勤懇	怠惰 勤懇
N	(中) 不潔 (西) 清潔	——					不潔 清潔	——	——	——
O	(中) 上下隔絶 (西) 上下疏通	——	君民不聯絡 上下宜通	摻政府於一人 合通國之君臣上下			上下隔絶 通上下之情	——	——	——
P	(中) 虛飾 (西) 質素	——			粉飾, 誇張		虛文, 奢侈 真誠, 質朴	虛文 簡朴不飾		

た可能性は少なくない。そこで最後に、表Ⅱで少なからぬ類似が見られる『中西関係略論』と「与程禧之書」・「総論時勢」、『自西徂東』と『盛世危言』、および「治安新策」と本稿冒頭で見た梁啓超の「中国積弱遡源論」のそれぞれについて、前者から後者への影響について具体的に検討する。

(1) アレン『中西関係略論』と鍾天緯「与程禧之書」・「総論時勢」

まず『中西関係略論』と「与程禧之書」での中西国民性の比較について見よう。さきに引用した両資料の日本語訳（九一、九二頁および八三、八四頁参照）には類似する箇所記号と傍線（『中西関係略論』にはA～H、「与程禧之書」にはa～h。Aとa、Bとb……が類似することを示す）を付しておいた。いま改めて両資料において類似する箇所を原文で示す（（ ）内は手代木が文脈をふまえて補った）。

- | | |
|-------------------|------------------------|
| A 東人好静不好動 | a 華人之性好静 |
| B 西人好動不好静 | b 西人之性好動 |
| C 外国视古昔如孩提、视今时如成人 | c (外国) 厭故喜新 |
| D 中国以古初为无加、以今时为不及 | d (中国) 视古人为万不可及 |
| E 西国有盛而无衰 | e (西国) 国势亦坐成强大 |
| F 中国每頽而不振 | f (中国) 人心因之委靡、国势亦於焉不振 |
| G 西国万事先、不甘落后 | g (西国) 视学问为后来居上、往往求勝前人 |
| H 中国墨守成規、不知善变 | h (中国) 往往墨守成法、不知变通 |

鍾天緯のa～hは、アレンのA～Hと表現はやや異なるものの内容はほぼ同じである。アレンのA～Hは彼の中国国民性認識の核心であり、中国人が独自にこれと同様の認識に到達していたとは考えにくい。

次に『中西関係略論』と『総論時勢』での中西政治の比較を見よう。前述のように「総論時勢」（一八八〇―八二）では、西洋では君主の権威は民意にもとづき、議会、裁判、選挙、新聞などを通じて「君臣上下を一体化する」が、中国では皇帝独裁の下で民心はバラバラで「家毎に勝手にふるまい、人それぞれ考えが違う」とする。こうした指摘は、アレンが『中西関係略論』で「君民一体となり上下は通じ合うべきである」（君民一体、上下宜通也）とし、君民の意思疎通のために西洋では議会や新聞が重視されることを紹介する一方、中国は「人々は勝手に振舞い」（各自為謀、「みな自己の平安のみを顧み、他人の困難を考えない」（各顧己之平安、不念他人之危困）^①）と指摘するのと同趣旨である。

前述のように鍾天緯は一八七二年から三年間アレンに英語を学んでおり、アレンの影響は大きかったと考えられる。その後アレンは『中西関係略論』を発表し、鍾天緯はドイツ出使期（一八八〇―八二）に「与程禮之書」と「総論時勢」を書いていく。こうした経緯をふまえれば『中西関係略論』と「与程禮之書」・「総論時勢」に見られる以上のような類似は、文明観転換を遂げ中国人としての新たな自己認識を形成する必要に直面していた鍾天緯が、アレンの「奥突」をつく指摘に敏感に反応し、自らの文章に取り込んだことを示すものと考えられる。

（2）ファーバー『自西徂東』と鄭観応『盛世危言』

この両著作を比較してまず気付くのは、『自西徂東』が指摘する一つ一つの中国国民性の多くが『盛世危言』でも指摘されていることである。以下、表Ⅱの共通項A～Pにあげた中国国民性のうち両著作が共通に取り上げる国民性について、それぞれのキーワードを表Ⅱから取り出してみる（まず『自西徂東』、次に『盛世危言』のキーワードを記す。（ ）内は『自西徂東』（以下『自』）の章次と『盛世危言』（以下『盛』）の篇名）。

共通項B（卑屈）は、「自卑」（自三三章）と「唯諾」（盛日報下篇）・「巧令」（巧言令色の意、盛典礼上篇）。共通項C（愚昧）は、「教養之失其道」（自二四章）と「教養失道」（盛教養篇）。共通項E（貪欲）は、「貪酷」（自一八章）・「貪婪」（自一四章）と「貪婪」（盛吏治下篇）。共通項F（利己）は、「顧一己之私」（自一八章）・「利己」（自一九章）と「各自為計」（盛交渉下篇）。共通項G（残虐）は、「酷虐」（自一八章）と「残忍」（盛刑法篇）。共通項H（虚偽）は、「虚假」（自三三章）・「詐偽」（自四三章）と「深文曲筆」（盛日報下篇）・「欺蒙」（盛教養篇）。共通項I（軟弱）は、「柔弱」（自七章）・「畏葸莫前」（自三四章）と「非潰即逃」（盛練兵下篇）。共通項K（保守）は、「固執成法」（自五五章）と「因循」（盛教養篇）・「墨守旧章」（盛獄囚篇）。共通項M（怠惰）は、「懶惰」（自二二章）と「曠職」（盛日報下篇）・「遊手好閑」（盛巡捕篇）。共通項O（上下隔絶）は、「上下隔絶」（自五二章）と「民情不能上達」（盛日報下篇）。共通項P（虚飾）は、「虚文」・「奢侈」（自三三章）と「虚文」（盛典礼上篇）。以上、『自西徂東』が指摘する中国国民性の大半が『盛世危言』でも同様に取り上げられ批判の対象となっていることは明らかであり、このことは『盛世危言』が『自西徂東』の影響を少なからず受けていた可能性をうかがわせる。

加えて指摘すべきは、両著作が共通に指摘する中国国民性は、その具体例にも少なからぬ類似が見出せることである。次に共通に指摘される中国国民性について、それぞれの具体例を簡潔に示す（『自西徂東』は表Iの要旨を参照）。

共通項B（卑屈）の「自卑」（自三三章）と「巧令」（盛典礼上篇）については、前者は接客時の卑下しすぎる態度をあげ、後者も賓客や上司に対して表面だけ媚びへつらう態度を指摘する。共通項C（愚昧）の「教養之失其道」（自二四章）と「教養失道」（盛教養篇）では、前者後者とも古の「教養之道」が失われ教育が廃れたとし、西洋に倣い学校を設け男女とも教育すべきことを指摘する。共通項E（貪欲）の「貪酷」（自一八章）と「貪婪」（盛吏治下篇）については、前者は役人の不正な徴税・強奪を述べ、後者も吏治の腐敗、不正な徴税を指摘する。共通項G（残虐）の「酷虐」（自一八章）と「残忍」（盛刑法篇）については、前者は監獄や刑罰の酷虐さをあげ、後者も用刑の残忍さをあげる。共通項I

〔軟弱〕の「畏葸莫前」〔「自」三四章〕と「非潰即逃」〔「盛」練兵下篇〕では、前者後者とも軍隊が西洋のような訓練、教育、装備、待遇を欠くために、敵を恐れ勇敢に戦えないとする。共通項M（怠惰）の「懶惰」〔「自」二一章〕と「遊手好閑」〔「盛」巡捕篇〕については、前者は盗賊から庶民までが賭博に溺れ役人はそれを見ても放置するとし、後者も会党が役人と結託して賭博や誘拐を行うと指摘する。共通項O（上下隔絶）の「上下隔絶」〔「自」五二章〕と「民情不能上達」〔「盛」日報下篇〕では、上下隔絶への対策として前者は西洋では新聞が下情を上達し上諭を下告するとし、後者も新聞により民情を上達する必要を説く。共通項P（虚飾）の「虚文」〔「自」三二章〕・「浮文」〔「糜費」〕〔「自」三三章〕と「虚文」〔「盛」典礼上篇〕においては、前者は喪礼・婚冠礼・饗宴礼や祈祷・祭祀での浪費をあげ、後者も婚喪寿慶の事、送迎宴会、年節儀式の華美を指摘する。以上、一部を示しただけだが、『自西徂東』と『盛世危言』では一つ一つの国民性への批判の際に念頭にある中国の状況や習慣にも、少なからぬ類似が見られるのである。

両著作の関係を考える上でもう一つ注目されるのは、鄭観応自身がファーバーと『自西徂東』に進んで言及していることである。清末の知識人は、一般に宣教師やその著作について肯定的に言及することはまれだった。そうした中で鄭観応は、『盛世危言』伝教篇でキリスト教の布教に反対しつつも、「中国の困難を座視するにたえられず、しばしば中外利病について書を著し世を救う」者として、アレン、リチャード、フライヤー、エドキンスとともにファーバーをあげている。⑩しかも『盛世危言』自序では、同書の情報源として「中外達人哲士」や「中外日報」のほか、「局外傍観論」〔中西關係略論〕やアレンの「中美關係略論」、リチャードの『四大政』、『七国新学備要』とともに『自西徂東』をあげており、⑪このうち中国国民性への言及が突出して多いのが『自西徂東』だった。以上のような両著作があげる一つ一つの中国国民性やその具体例の少なからぬ類似、および鄭観応自身のファーバーや『自西徂東』への言及をふまえれば、『盛世危言』の中国国民性に関する記述は『自西徂東』から直接の影響を受けていたと考えられる。

(3) アレン「治安新策」と梁啓超「中国積弱遡源論」

戊戌政変（二八九八）による梁啓超の日本亡命後に書かれた「中国積弱遡源論」には、日本で受容された西洋の国家主義思想などの影響が見られる。だが実は「治安新策」との類似点も少なくない。両著作を比較してまず気付くのは形式上の類似である。前述のように「治安新策」での中国国民性批判は、「局外傍観論」「中西関係略論」「自西徂東」とは異なり、批判する国民性を一つ一つ暴露していく形式をとるが、「中国積弱遡源論」でもこの形式は同じである。

類似は指摘される中国国民性の内容にも見られる。表Ⅱに示したように、中国国民性としてアレンは「驕傲」「愚昧」「恒怯」「貪私」「暴虐」「欺誑」「因循」「遊惰」の八つ、梁啓超は「奴性」「愚昧」「為我」「好偽」「懦弱」「無動」の六つをあげる。このうち「愚蠢」と「愚昧」、「貪私」と「為我」、「欺誑」と「好偽」はそれぞれ表記は異なるが同義といつてよい。加えて、それらの国民性を批判する際の具体例にも類似が見出せる（「治安新策」は九六、九七頁、「中国積弱遡源論」は七六、七七、七八頁を参照）。すなわち「治安新策」は「愚蠢」について、西洋の名門は男女とも学校で学ぶとし、「中国積弱遡源論」は「愚昧」について、西国の民は六、七歳で男女問わず学校にはいるとする。また「治安新策」は「貪私」について、日清戦争での敗北に関わって、督撫が自分の領域のみを顧み京師に危機があつても手を出さなかつたことなどを挙げ、「中国積弱遡源論」は「為我」について、日清戦争時、直隸一省が日本と対峙し各省の督撫は傍観していたことを指摘する。さらに「治安新策」は「欺誑」について、華人は嘘に慣れ公文書、私信とも嘘だらけで欺く心で人に接し欺かれるのを楽しむとし、「中国積弱遡源論」は「好偽」について、中国人が虚偽を好むこと古今未曾有であり、君臣、官民、朋友の間で虚偽が行なわれるとする。以上、梁のあげる中国国民性のうち少なくとも「愚昧」「為我」「好偽」については、それを批判する際に念頭にある事例まで含めてアレンとの類似が顕著である。

一方、「中国積弱遡源論」が最初にあげる「奴性」は、日本の影響を受けた概念として知られる。「奴性」は二十世紀初頭、麦孟華、梁啓超らによつてさかんに論じられたが、その契機は「中国積弱遡源論」が梁の編集による『清議報』に掲

載（七七―八四冊、一九〇一年四月―七月）されるのに先立ち、中国人の「奴隸性」を強調した『東京朝日新聞』記事（一九〇一年二月一〇日）の翻訳「支那人之特質」が同誌に掲載（七一冊、一九〇一年三月）されたこととされる。だが義和団事件における「侵華日本兵」の視点で書かれた「支那人之特質」の主眼は、日本軍におもねりへつらい、「強者には服従しなればならず、抵抗することはできない^⑬」とする中国人の卑屈性への批判にあった。他方、梁の「奴性」とは「他人に虐げられる人が同時に別の他人を虐げる人となる」ことである。梁は「支那人之特質」によって中国人の強者への卑屈性を強く認識させられる一方、「強者」日本人の視野には入らない中国人の弱者への傲慢性にも注目し、奴隸が同時に奴隸主ともなる「奴性」を指摘した。それでは中国人の傲慢性への認識はどこからもたらされたのだろうか。中国人の傲慢性は、十九世紀西洋人の中国国民性認識においてしばしば指摘され、アレンの「治安新策」でも八つの中国国民性の最初に「驕傲」があげられている。とすると「治安新策」における「驕傲」の指摘は、梁のいう「奴性」と深く関連し、梁が中国人の「奴性」を発見する上で重要な役割を果たしていた可能性も否定できない。

さらにいえば、梁啓超が最後にあげる「無動^⑭」は、中国人が汚吏の圧制、虐政の暴戾、外国の侵略に抗して動こうとしないと批判するが、この批判はアレンが『中西関係略論』で西洋人を「好動」、中国人を「好静」とし、「好静」を中国衰退の原因として批判したことを想起させる。梁の『新民説』（一九〇二―〇六）にはアレンのこの指摘の影響がうかがえるから、梁のいう「無動」もまたアレンを意識していた可能性がある。

ところで、梁啓超とアレンの関係はどのようなものだったのだろうか。一八九五年北京で強学会に参加したころ、梁は広学会関係の翻訳書を大量に読むようになる。アレンが編集する『万国公報』を特に重視し、『読西学書法』（一八九六）では「ヨーロッパの新聞の中文訳が多く、時事をうかがおうとするものにとつては必読である^⑰」と述べており、『西学書目表』（一八九六）では「前数年においてきわめて優れていた^⑱」と評して収録した西洋人著訳書の中でも最上級の評価を与えている。また『西学書目表』には、『中東戦紀本末』『文学興国策』『中西関係略論』などアレンの著書・訳書・編書十

七種を収めている。こうした記述からは日本亡命前の梁にとってアレン関係の出版物が西洋情報の主要な来源であったことがわかる。こうした中で梁が一八九六年上海で刊行した『時務報』初期の言論は、『万国公報』からの転載が少なくなかったが、それが明記されなかったためアレンら関係者は頗る不満だったという^①。しかし梁の著作には、その後もアレンとの関係がうかがえる。前述のように『新民説』には西洋人は「好動」、中国人は「好静」という指摘の影響がみられる。また藤井隆は、梁の「十種徳性相反相成義」（二九〇）で使われた「一盤散沙」の語が『中東戦紀本末』に起源をもつことを指摘するほか、『治安新策』での中国国民性批判の梁への影響にも言及している^②。

以上のように「中国積弱遡源論」が国民性批判の形式および一つ一つの国民性の内容やその具体例において、「治安新策」と少なからぬ類似性や関連性を有し、また梁啓超がアレンの言説に強い関心をもっていたことからすれば、「中国積弱遡源論」の中国国民性に関する記述は「治安新策」から直接の影響を受けていたと考えられる。付言すれば、「中国積弱遡源論」にみられる宣教師の中国国民性認識の影響はその後の梁の著作にも見出せるのであり、それが梁の改革論における基本的な認識となっていた。そして『新民説』では、そうした中国国民性への認識にもとづき、それが形成された原因が日本で受容した国家思想、権利思想、自由思想など伝統中国に見出せない西洋近代の思想・文化をふまえて分析され、国民性改造の用途が提示されることになるのである^③。

以上、三組の宣教師と知識人の著作を比較検討することで、宣教師の漢文著作で示された中国国民性認識の知識人への影響を明らかにしてきた。ここでは代表的な著作の間での影響関係を示したにとどまる。しかし、西洋理解の深化と文明観転換の進行にともない新たな自己認識の必要性が高まる中で、宣教師の中国国民性認識はこれらの著作を通じて徐々により広範な知識人の間にも拡大していったと考えられるのである。

① 『略論』論中外交接其聯絡維持之法究竟如何辦理、一一葉、総結前
論、二九葉左。

② 『自西徂東』（以下『自』）上海書店出版社、二〇〇二年、三三章、一〇九頁、『鄭』上冊、『盛』典礼上、三七五頁（一四卷本）。

- ③ 『自』二四章、七七頁、『鄭』上冊、『盛』教養、四八〇頁。
- ④ 『自』一八章、五五、五六頁、『鄭』上冊、『盛』吏治下、三五九、三六〇頁。
- ⑤ 『自』八章、二〇、二二頁、『鄭』上冊、『盛』刑法、四九九―五〇一頁（一四卷本）。
- ⑥ 『自』三四章、一一一、一二二頁、『盛』練兵下篇、八六九、八七〇頁。
- ⑦ 『自』二二章、六三、六四頁、『鄭』上冊、『盛』巡捕、五一二、五一三頁（一四卷本）。
- ⑧ 『自』五二章、一七八頁、『鄭』上冊、『盛』日報下、三五〇、三五二頁（一四卷本）。
- ⑨ 『自』三二章、九九―一〇二頁、三三章、一〇四、一〇五頁、『鄭』上冊、『盛』典礼上、三七六頁（一四卷本）。
- ⑩ 『鄭』上冊、『盛』伝教、四〇七頁。
- ⑪ 『鄭』上冊、『盛』自序、二三四頁。
- ⑫ 黄興濤前掲論文、郭双林、龍国存「国民与奴隸」『中国文化研究』二〇〇三年第一期、および梁啓超著・高嶋航訳注「新民説」平凡社、二〇一四年、第六節訳注②②、八五―八六頁。なお奴性概念には梁啓超が日本で受容したモンテスキュー、ルソーらの影響もあった。金城正篤「清末における『奴隸』『奴隸根性』論」『琉球大学文学部紀要』史学地理学、三〇号、一九八七年など。
- ⑬ 「支那人之特質」『清議報』中国近代期刊匯刊、中華書局、一九九一年、第五冊、四四九七頁。
- ⑭ 梁啓超は老子の言とするが、前漢の賈誼『新書』孽産子にみえる「無動为大」による。
- ⑮ 「白人之優於他種人者何也。他種人好靜、白種人好動、他種人狃於和平、白種人不辭競争、他種人保守、白種人進取」『新民説』『飲冰室合集』專集第三冊、上海中華書局、一九四一年再版、第四節、一〇頁。なお第一次大戦後、西洋文明の見直しの中で杜亜泉や李大釗に東洋文明を「静」、西洋文明を「動」とする東西文明論が見られるが、石川楨浩「東西文明論の日本の論壇」（『近代日本のアジア認識』京都大学人文科学研究所、一九九四年）はそうした議論は大正期のジャーナリスト茅原華山の影響であると指摘している。
- ⑯ 梁元生前掲書一四一頁、丁文江・趙豊田編、島田虔次編訳『梁啓超年譜長編』第一卷（岩波書店、二〇〇四年）八八―九〇頁、村尾進「万木森々」『時務報』時代の梁啓超とその周辺』狭間直樹編『共同研究 梁啓超―西洋近代思想受容と明治日本』みすず書房、一九九九年所収など。
- ⑰ 『説西学書法』、梁啓超著、夏曉虹輯『飲冰室合集』集外文（北京大学出版社、二〇〇五年）下冊、一六七頁。
- ⑱ 『西学書目表』西学書目表下、報章、一四葉左。
- ⑲ 梁元生前掲書一四一頁。また梁啓超が一八九六年に書いた汪康年・汪詒年宛書簡（上海図書館編『汪康年師友書札』（二）上海古籍出版社、一九八六年、一八四四頁所収、前掲『梁啓超年譜長編』第一卷、一―六頁で引用）にこの件に関わると思われるアレンへの言及が見える。
- ⑳ 藤井隆「『一盤散沙』の由来―広学会と戊戌変法運動」『現代中国』八二号、二〇〇八年。
- ㉑ 『新民説』については注⑫にあげた高嶋航訳注から示唆を得た。

結 語

一八七〇年代後半から八〇年代にかけて、文明観転換の過程で先進的知識人の間では中国文明とは別にその優位にある西洋文明の存在が認識されるようになっていく。そしてそれにもなつて、二千年来の伝統的文明観のもとでの中国人は文明化された中華の民、西洋人は野蛮で貪欲な夷狄の民という認識は改められ、西洋人との対比で中国人への新たな認識が形成されていった。しかし、そもそも西洋文明を生み出した西洋人を認識することは、彼らにとつてきわめて困難な作業であつた。一部の知識人には、開港場での西洋人との交際や出使・留学を通じて、西洋人と中国人の異質性を認識する機会がもたらされた。とはいえ彼らが認識できたのは一部の西洋人の限られた側面にすぎなかつた。西洋人が本当に優れているのか、いかに優れているのか、そして中国人が本当に劣っているのか、いかに劣っているかを認識するには、そうした機会は到底十分ではなかつた。

おりしも、知識人の文明観転換にやや先行して、長期に中国に滞在した宣教師が十九世紀西洋人の「文明」の西洋・「野蛮」の中国という構図での中西国民性認識を、漢文著作によつて清末中国に伝えはじめたことは、知識人が新たな自己認識を形成する上で恰好のモデルとなつたのだろう。西洋と中国を比較するのに十分な見聞をもたない知識人にとつて、宣教師の認識はキリスト教臭さへの違和感があつたにせよ抗しがたく強力な方向付け作用をもつたに違いない。宣教師の漢文著作が大量に普及される中で、知識人たちは宣教師言説を自らの体験によつて検証し、また自らの体験を宣教師言説によつて整理しながら、直接間接にその言説の影響を受けつつ、西洋人への認識とそれと対をなす自己認識を形成していったのだらう。そう考えてこそ、清末知識人の新たな自己認識が消極性、怠惰性、保守性、虚偽性、虚飾性、卑屈性、傲慢性などを強調する点で、不自然なほど類似している理由をはじめて理解できる。また従来その清末民国初の中国国民性批判への影響が注目されてきたスミス（Arthur Henderson Smith、明恩溥）の *Chinese Characteristics*、1890 の役割も、アレ

ン、ファーバーらの漢文著作の作用を前提として論じてこそ、正確に捉えることができる。

近代の西洋人は自らを文明人と認識するために野蛮な他者（オリエント、中国）形象を創り上げた（サイド、周寧）。十九世紀後半から二十世紀初頭にかけて、今度はその野蛮な中国形象が中国に持ち込まれ、文明観転換の過程にあった清末中国人の自己認識を方向付けることになった。彼らは西洋人の否定的な中国認識に強く影響されながら、新たな自己認識を形成することになったのである。^①一九二〇年代三〇年代の東西文化論争はこうした他者による見方に多分に依存した経緯への反動でもあったのだろう。

① この点について、石川禎浩「梁啓超の文明の視座」（前掲『共同研

究 梁啓超』所収）は、梁啓超における日本經由による西洋近代の

「文明史観」受容を通じて、また藤井隆前掲論文は、康有為・梁啓超

におけるアレン言説をふまえた「一盤散沙」という自己認識の形成を
通じて、指摘している。

【付記】 本稿は、二〇一七―二〇一九年度日本学術振興会学術研究助成基金助成金（基盤研究（C）（一般））「清末プロテスタント宣教師の中西文化論に関する基礎的研究」（代表、手代木）による成果の一部である。

（福島大学経済経営学類教授）

Qing-Dynasty China's Shift in Perspective on Civilization and Self-Awareness

by

TESHIROGI Yuji

Through their encounter with Western modernity at the end of the Qing Dynasty (mid 19th century - early 20th century), Chinese intellectuals shifted their traditional perspective on civilization that had seen Chinese as the lone civilization but now recognized the superiority of Western civilization, which was understood as different from Chinese civilization. How then did they formulate this new self-awareness in the process of comparing themselves to the West? Conventionally, this new self-awareness is thought to have been addressed after the Sino-Japanese War (1894-95) by Yan Fu 嚴復 and Liang Qichao 梁啟超 in studies critical of the national character. In fact, however, a new self-awareness critical of the national character appeared during the shift in perspective on civilization prior to the Sino-Japanese War. The purpose of this paper is to follow the process of renewed self-awareness among Qing Dynasty intellectuals, clarifying the commonality seen therein while considering the relationship between self-awareness and missionary discourse, and also clarifying how the formulation of a new self-awareness accompanied the shift in perception of civilization in Qing-dynasty China.

The original idea of a new self-awareness seen in the criticism of the national character after the Sino-Japanese War had already begun to appear among some intellectuals, such as Wang Tao 王韜, Zhang Deyi 張德彝, Zhong Tianwei 鍾天緯, and Zheng Guanying 鄭觀應, in the latter half of the 1870's to the 1880's, in the shift in perspective on civilization triggered by the acceptance of Western information and the dispatch of diplomats to the West. Their self-awareness was strangely similar in that it portrayed Chinese people in a generally negative light, highlighting their conservativeness, negativity, laziness, proclivity for falsehoods, subservience, and selfishness.

What is noteworthy here is that just prior to the formulation of this new self-awareness by intellectuals, the missionaries had characterized the

Chinese people and wrote in Chinese criticizing the Chinese people as conservative, negative, lazy, having a proclivity for falsehoods, being subservient and selfish based on the negative view of China formed by Western modernity that had been built up by thinkers from Montesquieu to Hegel. Moreover, Young J. Allen's *Zhongxi Guanxi Lüelun* 中西關係略論 and "Zhi'an Xince" 治安新策 (published in *Zhongdong Zhanji Benmo* 中東戰紀本末) regarded as the representative Chinese language missionary works, and Ernst Faber's *Zixi Cudong* 自西徂東, which was published in *Wanguo Gongbao* 万国公報, were circulated from the latter half of the 1870's onward, *Zixi Cudong* and *Zhongdong Zhanji Benmo* as individual books were popularized wholeheartedly by the Guangxuehui 廣學會 among bureaucrats and intellectuals from the end of the 1880's until around 1900.

Based on the above, when conducting a comparative examination of the self-awareness of Chinese national character found in the Chinese language works by missionaries and those that followed written by intellectuals, in particular *Zhongxi Guanxi Lüelun* and Zhong Tianwei's "Yu Cheng Xizhi Shu" 与程禧之書, *Zixi Cudong*, and Zheng Guanying's *Shengshi Weiyang* 盛世危言, "Zhi'an Xince" and Liang Qichao's "Zhongguo Jiruo Suyuan Lun" 中国積弱遡源論, in each case considerable similarity is seen between the content of the Chinese national character being criticized and the specific examples. From the remarks of the intellectuals and associated materials, we can also see that they were deeply involved with the missionaries and their works. Based on this, it becomes obvious that the criticisms of the Chinese national character by Allen and Faber had a profound effect on Zhong Tianwei, Zheng Guanying, and Liang Qichao's awareness of the Chinese national character. Additionally, we can assume that such awareness of the national identity gradually spread among a broader range of intellectuals due to the popularity of Chinese-language translations of the missionary's works.

In the process of the shifting perspective on civilization, Qing-dynasty intellectuals were faced with the formidable task of formulating a new self-awareness. At that time, the earlier criticism of the Chinese national character expressed by the missionaries had a strong influence on how the intellectuals, who were seeking an alternative to the traditional Chinese awareness, shaped their self-awareness. This line of thinking enables us to understand for the first time the mysterious similarities found in the new self-awareness of intellectuals.

Key Words; Qing Dynasty China, Shift in perspective on civilization,

Self-awareness, Criticism of the national character, Missionary